

3

2020. MAR VOL.59

総発行部数 83,900部

無料各戸配布 81,530部
無料設置 2,370部

とみいず!



巻頭特集 とも子助産院 震災乗り越え節目の20年

みんなの放課後活動 みんな活 白百合学園高等学校放送部
てくてく散歩～泉中央エリア～
Happy gourmet
磨きはじめる
新生活をはじめる

地元の求人情報が満載! JIMO JOB ジモジョブ

スマホで
表紙を
スキャン!

フリモARを
起動して
表紙にかざすと
施設紹介が
流れます

フリモARは表紙右下でダウンロード!

伝すぐダウンロード!!

スマートフォンのApp Store®、
またはGoogle Playで「フリモAR」と検索!

表紙がもっと
楽しくなる!!  フリモAR



震災乗り越え

節目の20年



泉区野村にあり、長年にわたり地域の妊婦や母親たちを支えてきたとも子助産院。県内で3院しかない分娩までを扱う助産院であり、9年前に東北地方を襲った東日本大震災の発生時にはライフラインが寸断されるなか、地域の母子の命をつなぐ大きな役割を果たした。開院20年の節目に、使命感に満ちる現場の助産師たちの姿を伝える。

災害を乗り越え

9年前、平成23年の3月11日午後2時46分。東日本大震災の発生当時、とも子助産院は日々の通常業務のさなかにあった。突然襲った激しく長い揺れ。棚からはさまざまなもの落下。カルテ庫や戸棚などは大きく動き、部屋中が散乱した。施設は一部で壁が壊れ、その後の認定では半壊となる被害だったものの、幸いにも母子に被害はなかった。しかし、自宅が全壊し2週間助産所に避難、保育園や学校が休みのため、子連れ出勤で働いてくれたスタッフもいた。

9年前のあの日は、卒業シーズンだった。式に出席する母親から乳幼児を1人預かっていたけれど、地震と大津波の混乱のなかで家族と連絡が取れない状態に。それでも、夜には何とか駆け付けてくれた家族に引き渡すことができ、安どしたという。

混乱の続く震災2日後の13日。母親の1人が産気づき来訪。当然、水道も電気もガスも、あらゆるライフラインがストップしていた極限状態の真っ只中だ。だが、やるしか



震災の36時間後。ランタンの灯りのもと新しい命が生まれた

ない。院長の伊藤朋子さんは、懐中電灯とランタンの明かりを頼りに、母親を励まし、生まれくる新たな命を迎えた。震災直後の混とんとしたなか、同院では希望ともいえる赤ちゃんが産声を上げたという。

テレビ報道で同院の開院情報が流れると、電話回線の回復とともに、各地から「宮城にいる娘が分娩予約していた病院が被災しているようだ」「大丈夫か」と他県の親御さんからの心配の声や、「放射能が心配で、どうしてもいいか」「なにか手伝いたいので、欲しいものを言ってください」など、問い合わせが相次いだ。伊藤さんは葛藤がありつつも、「まずは目の前にいる人たちを助けたい」と日本助産師会に現状を相談。すると全国の助産師たちが、電話の転送を受けて対応してくれることに。「私たちが目の前の妊婦さんたちに専念できたのは全国の助産師たちのおかげ。本当にありがたかった」と当時を振り返りながら感謝する。

災害看護の研修会での学びをもとに、燃料や食料、水の備蓄を常にしており、これにより震災時にはそれらを地域に供給するこ

ともできた。地域の医療施設として、全国から支援物資も早くから集まってきており、宮城県助産師会として活動した。ガソリン不足で移動が制限され、かかりつけの病院に通院できなくなった人々たちについても、各病院から患者の情報をもらって対応。風呂焚きには灯油を使用していたため、ガス復旧を待たずに、4日目の水道再開後は、近隣住民の体を温めることもできた。

ガス復旧には、2カ月以上かかった地区もあった。日本財団やジョイセフなどの支援を受け宮城県助産師会が実施した被災母子支援事業に参加し、被災母子の宿泊や、無料の母乳外来・家庭訪問などを、助産師会会員が行った。助産院での宿泊を家族で利用出来るようにするなど、でき得る限りの対応で寄り添った。

ローテクは強い

同院では日頃から、母乳育児を推奨してきた。これは免疫力の観点からだけでなく、消毒やお湯の確保といったライフラインが寸断された際にも非常に重要となるからだ。母乳は、母親がしっかりと食事を摂ってさえいれば与えられる。また、免疫力が向上



伊藤 朋子 院長



生まれたての弟の髪にブラシをかけて、手伝っている新米お姉ちゃん



助産院のリビングで、くつろぐママたち

するだけでなく、親子の精神的安定や絆も強くなるという。実際に震災を経験した直後の宮城県の母乳率は全国1位となり、災害の経験を機に母乳の重要性は一層広がりを見せている。佐藤さんは「倉庫いっぱいミルクをためるより、母親が健康ならば与えられる母乳はとて有用」と呼び掛ける。災害時には日頃享受してきた便利さが脆弱性と紙一重であるのを痛感する。だからこそ、母乳に限らず、ひも一本で幼児をおんぶする方法、布おむつの使い方など、昔ながらの技術をしっかりと伝えていくのは今もなお重要だ。それらを理解したうえで、日常における紙おむつやおんぶひもといった便利な道具による負担軽減が意義のある役割を果たしてくれるようにもなる。災害が多発する近年は特に、便利な道具とうまく付き合いつながり、非常時に対応できる知識を持つのが大切になっているのである。

大事なもの

今年で20周年の節目を迎えるとも子助産院を開業したのは、伊藤さんが34歳のとき。

「第二の実家」がキャッチフレーズで、開業当初から変わらず、妊婦さんや家族、乳幼児が訪れて、ゆっくりできる空間を目指している。「病気を治すのは病院とお医者さん。助産院は病気になるないように環境を整えて、その人の持っている力を引き出すのが役目」と伊藤さん。昔は地域に産婆さんといった助産に精通する人が必ず一人はいた。しかし、時代が進むにつれ病院整備や医療集約が進み、身近な頼れる人材は少なくなっていた。

実際、分娩までを扱っている助産院は現在、県内で3院。助産師の多くは病院で働いている。一般の病院では子どもたちと一緒に入院するのは難しいが、助産院ではそれも可能だ。出産後に心身が不安定になる母親にとって、「助産院の存在が本当にありがたかった」との声をもらう場合も多い。

伊藤さんは「人間はもともと集団で子育てする生き物。今もそれは一緒で、お母さんがたった一人で赤ちゃんを育てられるようにはできていないんです。人間の

地域の妊婦、母親を見守る



2



1



1. 生まれたての赤ちゃんたち
2. 2011年11月には、ジョイセフとともに支援した、被災母子のおしゃべり会が開かれた



野菜たっぷりの手作りご飯。家事チームが、心を込めて調理している



まるで自宅にいるような雰囲気の院内。「第二の実家のように思ってもらいたい」との院長先生の思いが詰まっている

とも子助産院

泉区野村字野村95-6 ☎022-772-5960

○外来日程 **完全予約制**
初めての人も電話連絡のうえ、来院を

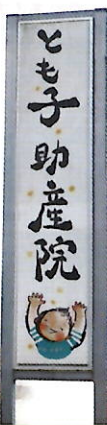
	月	火	水	木	金	土	日
9時～12時	○	○	○	休	休	○	○
13時～16時	○	○	○	休	休	○	

○3月のイベントカレンダー

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				



2012年10月
特定非営利活動法人日
本助産評価機構による
認定を受けた



伝えていくもの

少子化で出生数の数も減少傾向の現代。核家族化などで子育てに関する知識や情報が受け継がれない場合も多い。そのような環境にあつて、一緒に子育てをし、知識や経験を伝える助産師の役割はより重要になってきている。

赤ちゃんは他の生き物と違い未熟で生まれてくるので、とつても手がかかりますよね。里帰り出産も難しくなるなかで、どう母子に寄り添うかが私たちの役目」と助産師の重要性を語る。

特に産後は疲弊した母親に対する周囲の支えが何よりも重要になる。助産院は、幸せに子育てする環境を整えるのも大きな役割。「ママが幸せじゃないと家族が幸せにならない。ママを甘やかすと、意外と多くのことがうまくいく。食べて、寝てがとても大事です」と打ち明ける。

東日本大震災時、多くの想定外によって地域が混乱するなか、同院が目への使命を全うできたのは過去の災害の経験から学び、常に備えてきたからこそ。それは出産や子育ての知識と経験を未来につなぐ助産院の仕事に大きく通じる。また、その裏には同院だけでなく、母子を思う全国の助産師の支えもあった。支え、支えられるのは子育ても家族も一緒。開業から20年、とも子助産院は、今や地域にとつてかけがえのない「第二の実家」となっている。



- 震災直後の雪の中、妊婦さんや赤ちゃんがやってきた。寒い3月だった
- 震災後の停電中は、石油ストーブが活躍した
- 赤ちゃんは、寝かせると背中スイッチが、オン。すぐに泣いてしまう。抱っこが大好き
- 一緒に泊まった赤ちゃんのお兄ちゃんたち
- 足湯を楽しみながら、お茶するママたち

